

【山姥切の推し活】

愛されたがり。／しも

「……」

「長義さん、大丈夫ですか？どこか具合でも……」

「……物吉か。別に、どうということはないよ」

「気にすんな、化け物斬りが機嫌悪そうなのはいつものことだろ」

酒に酔うと些細なことで笑うようになる、泣くようになる、怒るようになる。それだけならまだしも、お前ももつと飲め、俺の注いだ酒が飲めないのか、などと絡み始めるものまでいる。しかも翌日には周囲に迷惑をかけたことなど都合良く綺麗さっぱり忘れているし、忘れているから、悲劇は何度も繰り返し返される。酔っ払いと、非常に厄介なものだ。

もちろん、酒が悪いわけではない。悪いのはあくまで、適切な飲酒量を守れない人間や刀剣男士の方だ。ただやはり一度酔ってしまえばもう正論は通じないし、ならばと思って事前に口を酸っぱくして注意したとしても、宴会の浮かれた楽しい空気感にどうしても流される。流されて飲みすぎて、理性を失う。

相手を変えられないのなら自分が、君子危うきに近寄らず、の精神を持つより他はない。厄介ごとに巻き込まれる前に逃げる、危機管理能力を高める、それしかない。

ただそうやって逃げるのが可能なのは時の政府内においての話であり、本丸に配属されるとなればどうしても宴会とは切っても切れない仲になる。主たる審神者の就任記念日や誰かの顕現記念日、花見などの季節行事。自分が飲む飲まないは別としても酒のある場への参加が求められるようになるから心を強く持て、監査官時代の長義は上官から何度もそう言われていた。

その上官の言葉はやはり正しかったと、長義は思う。一部の刀剣男士による飲み会への誘いは断ることができても、本丸全体の行事として行われる宴会は参加せざるを得ないものだ。断るという選択肢はない。

もちろん、本気で拒否するものを強引には誘わないだろう。ただ長義側も、審神者や仲間達への好意と情がある。持てるものとして与えてやらねばという意識もあるし、そもそも、宴会自体が心底嫌だというわけではないのだ。皆の楽しそうな顔を見て、笑う声を聞いて、美味しい酒と料理を味わう。それ自体は、長義だって好んでいることなのだから。ただ適切な飲酒量を守れ、と思うだけだ。

なので長義は今日も、宴会に参加している。お前達が飲み散らかしたものの、食べ散らかしたものを片付けるのは誰だ。そう思いながら今日も、宴会に参加している。

まあ、それだけならいつものことだとして話は済んだ。最後まで

で理性を保っている仲間と共に室内を片付けて、手分けしながら酔い潰れた刀を部屋に運んで。そして最後にお疲れ様と、残り物を摘んで互いに労う。そんな静かで密やかな楽しみだつてある。

だから別に、それは良い。結局のところ、何だかんだと言いながらも周囲の面倒を見るのは嫌いではないから。

つまり長義がわかりやすく機嫌を損ねている理由は、違うところにある。それを昔馴染みに指摘されても取り繕う余裕さえないほどに機嫌が悪い理由、茶化されても反論できないほどに機嫌が悪い理由は、違うところにある。

「ん、ふふ、ほんか、すきだ〜♡」

「兄弟、宴会に本歌さん抱き枕連れてきたの？」

「つれてきた！ねるときだけじゃなくて、いつつもいっしょがい
いからあ……な、ほんか♡うん、ふかふかだ♡」

これだ。問題は。本来の口調を維持できないほどに酔った国広
が締めりのない赤ら顔を晒しながら、宝物らしい『山姥切長義等
身大抱き枕』にぎゅうぎゅうと抱きついて甘えていること。

ちなみというか当然というか、『山姥切長義等身大抱き枕』と
やらは長義が与えたものではない。山姥切長義という刀剣男士の
存在に飢えた国広がどうにも我慢ならんと、審神者同士で交流の
ある別本丸の長義をモデルに作らせてもらったものらしい。

それゆえか、中身は綿といえど非常にリアルな出来である。顔
も髪も装束もまさに山姥切長義そのものであり、遠目で見れば誰
も抱き枕だとは思わないだろう。よほど飢えていたのか、国広が
山姥切長義を再現するべくすべてのパーツにおいてこだわり抜い
たことが窺える。

そして恐らく山姥切長義側も、この俺を写すなら、と細かく監
修したに違いない。もちろん最初は困惑し、断つたはずだ。己の写
しからの申し出であつても領けないものを、別本丸の写しに言わ
れたのだから。

それでも最後に領いたのは、やはり国広の熱意があつてのこと
だろう。わかりやすく言えば、根負けしたのだ。ただその経緯はど
うあれ、引き受けたのなら最高のものを作ろう。そう開き直るよ
り仕方なかったのだ。

『……何だ、これは……っ!?』

長義も、この抱き枕の存在自体は知っていた。特命調査監査官
の任を終え本丸配属となつてから三ヶ月ほどが経ったある日、国
広の部屋を訪ねた時に発見したのだ。いや、発見したというより
出逢つたと表現する方が正しいかもしれない。それはまるで、己
こそが部屋の主であるかのような顔をしてふかふかの座布団の上
に鎮座していたのだから。

その時長義が受けた衝撃は計り知れない。常に冷静沈着で理性的という山姥切長義のイメージを重視して叫ばなかった自分を褒めてやりたいという気持ちと、本当に驚いた時は声が出ないものだと人体を不思議に思う気持ちとがあった。

長義が部屋の前に立ち尽くしていると、本来の部屋の主である国広が戻ってきた。彼は状況を察し、長義に土下座した。

『……す、すまない、決して……あの本歌は、決してやましいものではなく……』

『あれをやましいものだと思わないなら、俺は主による道徳教育が不十分だと判断する。不可だ。破棄するぞ』

『ま、待ってくれ！わかった、ええと、その、や、やましいものだと認める！』

『やましいものなら破棄する、良いな！』

『そ、そんな、認めれば許してくれるんじゃないのか……俺を騙したのか!?』

そんな問答を経て、作成に至る経緯をすべて聞いて、結局その抱き枕は破棄されなかった。長義としては一刻も早く燃やしてやりたかったのだけれど、その抱き枕の存在はすでに本丸中に認知されていた。それゆえか、作り物とはいえ山姥切長義という刀剣男士をリアルに再現しているため破棄することは気が引けるとい

う民意が勝ってしまったのだ。物に宿る想いを励起するという特殊な力をもつ審神者にとってもやはり、自分の刀を模したものを粗末にはしたくないということだった。

そして何よりその抱き枕は、国広が長義に逢いたくて焦がれる心そのものである。この本丸は放棄された聚楽第への経路が閉ざされてから発足しており、再度開かれた時も、審神者の体調不良により特命調査は不参加となっている。そうして長らく山姥切長義を迎えることができず、万屋街や演練場で本歌と写しが並ぶ姿を見続けるだけだった国広はついに拗らせてしまったのだ。

審神者が国広とその抱き枕を庇うのは、彼が拗らせてしまった原因は自分にあるという負い目からだろう。最初の特命調査に参加できなかったことは仕方ないにしても、山姥切長義を迎える二度目の機会をふいにしてしまったという。

もちろん、それだって仕方のないことだ。刀剣男士にとって何より大切なのは主たる審神者であり、その健康を害するようなのは避けなければならない。国広だって、審神者を責めたことは一度もないはずだ。

国広が自分を責めないからこそその負い目、というものはあるかもしれない。だからこそ、交流のある別本丸の審神者を通して山姥切長義に働きかけたのだ。その結果生まれたのがあのリアルな等身大の抱き枕であったのは、審神者にとってもその山姥切長義にとっても驚くべきことだっただろうけれど。

長義は最初こそ驚いたしそんなもの燃やしてしまえと迫ったけれど、それが、国広が己を求めた結果だというのなら。それがどれほどおかしいことであっても、それが、国広が己を求めた証だというのなら。

そう考えると、責める気にはなれなかった。考え直したのだ。等身大の抱き枕を作ってしまうほどに己に焦がれている写しは、実はとても可愛いのではないかと。

ただ、その抱き枕のモデルは己ではない。確かに国広が己を求めた証、焦がれた証ではあっても、そのモデルとなったのは別本丸の長義である。考え直した結果、それを所持していることは容認せざるを得なかったけれど、やはり許すことはできなかった。

しかもどういふわけか国広は、長義が歩み寄れば歩み寄るほどに逃げるのだ。別本丸の長義をモデルにリアルな等身大の抱き枕を作ってしまうくらい逢いたがっていたはずなのに、それほど長義に焦がれていたはずなのに、いざ本物の長義が与えようとする^{と逃げるのだ}。

堀川を通して逃げる理由を確認すると、国広は恥ずかしいのだという。ずっと抱き枕の長義と共に過ごしてきて、それである程度心が満たされた部分もあって。それゆえにいざ本物の、刀剣男士の山姥切長義を迎え、どうして良いのかわからなくなったそう^だ。しかも抱き枕の存在を知られており、同時に己の気持ちも知られている。それが、羞恥心に輪をかけているのとか。

恥ずかしさ。戸惑い。もしかすると、長義による嫌味も影響しているかもしれない。あの抱き枕は当然、偽物くん、などと言ったりはしないから。そう、あれは国広にとつてただそこに在ってくれるだけの、都合の良い存在なのである。

そんなものを、長義が許せるはずはない。所持し続けることを容認することと許すことは、絶対的に違うのだ。

それほど己に逢いたかったというのなら、素直にそう言えば良いだろう。己が与えてやると歩み寄ったのだから、素直に喜べば良いだろう。己の偽物で満足するなど決して許せないし、本歌たる己から大人しく与えられれば良い。

ずっと、そう思っていた。

「やはり燃やすか……、」

長義も、あの抱き枕の存在を知っていた。けれど実際、国広が普段それとどのようにして過ごしているのかを見たのは初めてである。本丸中に存在を認知されているといっても、国広がああ抱き枕を部屋の外に出すことは基本的になかったから。

そして何より長義自身が、そんな光景など見たくなかった。だから極力国広の部屋には行かないようにしていたし、行ったりしても、室内に入るのではなく主を廊下と呼び出して話をした。己の写しが同位体をモデルに作った抱き枕を抱いて眠るということ

は、同位体に写しを奪われたも同じ。だから国広がそれと触れ合う光景など、見たくなかった。

初めて目にしたその光景は想像の百倍、いや、千倍もひどいものであった。国広が、己の大切な写しが、恥ずかしげもなく同位体にべたべたと甘えている。瞳を濡らし頬を上気させ、舌足らずになりながら、好きだ好きだと何度も繰り返して甘えている。

国広にとって本歌はただ一振り、この己であるはずだ。三度目の聚楽第特命調査を経てついにやって来た、この己であるはずなのだ。なのに、それをずっとそう呼んで。甘えて。

長義にとって、それは悪夢だ。写しを奪われたのだ、よその山姥切長義に。

「ほんか、ちゅう……♡」

そしてついに、長義の堪忍袋の緒が切れた。国広が抱き枕、もとい別本丸の長義の口を吸おうとしたのだ。

「ちゅう……っ!？」

「……お前、本歌たるこの俺を前によくもそんな真似ができたものだね」

「んん……？ほんか、ふたりいる……？」

「はっ、そんなものと同列に語られるのは不愉快だ。不可だよ、お

前は不可中の不可だ」

「んむ……おれのほんかはそんなこといわな、っ！」

長義は抱き枕にべったりと張りついて国広をべりと引きはがし、口づけを阻止することに成功した。ただ国広は状況をあまりよく把握していないようで、ぼんやりとしている。抱き枕の長義と刀剣男士の長義の違いさえ、わかっていない。

いったいどれほどの量の酒を飲んだというのか、長義は頭痛がしてくるようだった。向かい合って話しているはずなのに、焦点が合わない。話がかみ合わない。心が重ならない。

いつだってそうだ。酒を飲んでいなくとも、国広は長義を見ようとはしない。抱き枕の、別本丸の長義の方にばかり意識を向ける。恥ずかしいだとか色々と言いつてしているけれど、結局のところ、本物の長義と向き合うのが怖いのだ。

長義がどのような想いで、どのような覚悟で、山姥切の名を背負いながらこの本丸にやって来たか。国広は、知ろうとしない。

「……んうっ！」

だから、酒に濡れた唇を吸ってやった。公衆の面前で自らリアル抱き枕に口づけようとしていたのだ、自分に口づけられても良いだろう。同じことだろう。どちらも山姥切長義なのだから。長義

はそう、自虐的かつ乱暴に解釈した。

国広の唇を吸って、食んで、齒を立てて、舌を這わせて。意地悪く、わざとらしく音を立てて。長義は何度も角度を変えながら、国広が酸素を求めて背をバシバシと叩き始めるまですつと、その唇を吸い続けた。

「……ぶは、っ！はあ、は……っ、」

国広は肩を上下させながら、必死に酸素を取り込んでいる。そして、酔いが覚めたときまではいかずとも先ほどまでに比べるといくらかましな状態にはなったのだろう、久しぶりに長義と視線を合わせた。目の前にいる長義が抱き枕ではないこと、審神者も仲間達もいる宴会の場で口を吸われたこと。その両方を、きちんと認識しているようだった。

認識しているようではあるけれど、国広は何も言わない。逃げることもしない。ただただ、長義を見つめている。頬の赤さはいまだ残る酔いによるものか、それとも。

もう、長義にはどうでも良いことだった。国広と抱き枕を担いで大広間を出て、自室へと向かう。きつと仲間達は今頃、自分達の話を肴にまた酒を飲んで騒いでいるのだろう。それも、どうでも良かった。どう思われようと、何と言われようと。

長義にはただ、国広への怒り交じりの愛しかないから。

「……っ、あ、やだ、」

「嫌なら俺を押し退ければ良いだろう」

「んう……っ！」

自室に入ると長義は国広を布団に落とし、抱き枕を畳へと落とした。そして国広に覆いかぶさり、首筋を強く吸う。写しは決して本歌のものではないけれど、それでもこれは俺のものだと、そう示すように。国広にも審神者にも仲間達にも、そしてどこかの誰かにも。長義自身にも。

国広は身を振るけれど、それ以上の動きは見せない。嫌なら押し退ければ良い、その言葉通り長義は国広が抵抗できないほどの強い力を込めているわけではなかった。国広が酔っていることを差し引いても、決して、彼にとって不利な状況ではない。

だというのに国広は、ただ身を振るだけ。ぐずぐずと甘えた声で、小さく鳴くだけ。その手は、長義の上着を掴んでいる。掴んで引きはがそうとしているのか、それとも、掴んで引き寄せようとしているのか。

それもまた、長義にとってはどうでも良いことだった。最初から決まっているのだ。これは、俺のものなのだから。

「……や、うう……ほんか、ほんかがみてる……っ、」

「お前の本歌はこの俺だろう、……そんなもの、見せつけてやれ

ば良い」

国広はこの期に及んで、抱き枕の長義へと視線を向けた。いつもふかふかの座布団に座らせてもらい優雅な日々を送っているそれは今、畳に転がっている。表情の作り込みがリアルなだけに心なしか、不服そうに見えてしまう。

ただ国広のその言葉は、長義に残された最後の良心と理性を碎くものだった。お前の本歌はこの俺だろうと、首筋にくっきりとついた痕に満足する間もなく今度は齒を立てる。長義は国広がそれを本歌と呼ぶことに、ずっと苛立っていたのだ。

許さない。泣いて謝ったとしても、許してなどやるものか。今までずっと己から逃げ続けてきた写しをようやく腕の中に閉じ込めたのだ、もう二度と離しはしない。

長義はそんな思いで、国広の上に倒れ込んだ。

「行ってくる、綿の本歌と綿の俺」

結論から言うと、長義の刀身代抱き枕が破棄されることはやはりなかった。ただ、ベースはそのままに顔や細かな部分をこの本丸の長義を模して改めて作り直した。改良版、という形になる。

そしてそれは今も、国広の部屋にいる。正しくは国広と長義、二振りの部屋に。宴会から抜け出したあの夜、結局長義はあれ以上

国広に触れることはなかったけれど、ようやく視線を合わせて話せるようになったから。心が重なるようになったから。

「さて、今日も敵に死を与えてこよう」

それは今もふかふかとした上等の座布団を用意され、まるでこの部屋の主であるかのような顔をして鎮座している。そしてその隣には、国広を模した等身大の抱き枕がいた。顔も髪も装束も、まさに山姥切国広。長義が己の写しを再現するため、すべてのパーツにこだわったことがわかる。

ただ、こだわり抜いて作られた二振りであるけれど、本来の部屋の主によって時々押し入れにしまわれる。彼らには見られたくないことをするからだ。

けれど長義は近々、彼らを座布団に座らせたまま国広を抱くのも悪くないと内心思っている。見られているという羞恥心が国広の感度を高めることを知っているし、今まで散々焦らされた仕返しをしていかなければいけないのだ。これからたっぷり、時間をかけて。

「……何か悪いことを考えている顔をしている」

「別に、ただお前を愛したいだけだよ」